

小学校国語科「読むこと」における「深い学び」を促す思考方法と発問

同一作者（レオ＝レオニ）の絵本の活用に焦点を当てて

細 恵子¹

要約

本稿の目的は、同一作者の絵本を読む国語科において、「深い学び」を具体化するために、思考方法を検討し、読解だけでなく読書活動にも応じた発問を構想し、読み方や考え方の可能性を示すことである。本稿では、小学校第2学年の単元「スイミー」の中に絵本『スイミー』、『フレデリック』、『コーネリアス』を取り上げ、総合的な学習の時間に活用される「考えるための技法」と、発問に関する先行研究を援用して行った教材研究を示している。結果としては、「何と何とを関連付けて何を考えるのか」を具体化することにより、多様で視野の広い発問を構想することができた。本稿で示した思考方法と発問は、読む力とともに学びに向かう力、人間性等の育成にも資する可能性がある。

キーワード：「深い学び」、絵本、同一作者、思考方法、発問構想

1. はじめに

これからの社会は、情報化、グローバル化等が一層進むと予測されており、そのような社会に生きるために必要な資質・能力が、新学習指導要領において、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理されている。そして、それらを育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で授業改善を進めることが強く求められている。

これまでも小学校の国語科において、主体的に取り組む活動やグループ、学級で話し合う活動は取り入れられてきた。しかしながら、これらの活動をすることが目的化してしまい、資質・能力の育成に結び付かないという課題が見られてきた。その理由の一つとして、「深い学び」の姿を具体的にイメージすることが困難であることが考えられる。

例えば、小学校国語科の教科書教材「読むこと」の単元の終わりには教材を読むための「てびき」が示され、その終わりに関連図書の紹介がされているが、関連図書を教科書教材とどのように関連させて読むのか、関連図書を用いる読書活動によりどのような資質・能力を目指すのか等については明確に示されていない。「読むこと」の学習においては、本に親しむだけでなく本を読む力を身に付け日常の読書生活を高めていくことができるよう、複

数の本を読む読書活動を取り入れた単元構成をし、「深い学び」の内容や方法を具体化する必要がある。

細(2019)では、同一作者の絵本を読む読書活動が初めて「てびき」に示される、単元「スイミー」(第2学年)において、「深い学び」を促すための絵本の教材研究が行われている。そして、単元として①絵本『スイミー』と、共通点の多い絵本『フレデリック』とを比べ読みする場合、②『スイミー』において読む技能を習得した後、それを活用して『フレデリック』を読む場合を想定し、「深い学び」を促す思考方法とそれにより導かれる読み方、そのための発問例が構想されている。

本稿では、児童が本を読む力を身に付け日常の読書生活を高めていくことを目指し、「深い学び」を生む教材としてレオ＝レオニの絵本『スイミー』、『フレデリック』と『コーネリアス』を取り上げる。これらはすべて中心人物の名前が題名になった絵本である。

本稿の目的は、『スイミー』と『フレデリック』の学習で行われる読み方が『コーネリアス』でどのように活用されるか、新たに生み出される読み方はどのようなものか等について教材研究をし、同一作者の絵本(中心人物の名前が題名になっている絵本)を読むことにおける「深い学び」を促すための思考方法と発問構想、読み方や考え方の深い状態を示すことである。

¹ 千里金蘭大学

2. 「深い学び」の捉え方

「深い学び」の意味については、山本(2017)や奈須(2017)、田村(2018)が示している。3人の捉え方の共通のキーワードは、知識の結び付き・関連付け・構造化である。3人の知見を踏まえると、「深い学び」は、未知の課題や他の教科等における課題においても、それまでに習得したどの知識や技能をどのように結び付ければよいかを考え、進んで活用して解決したり、さらに、知識を生活場面と結び付けて自分の生き方をよりよいものにしたりしていくことであると捉えられる。田村は、構造化を知識がつながっていくことと捉え、①知識や技能が相互につながり、概念を形成していくタイプ、②知識や技能を他の場面、未知の状況につなげていくタイプ、③知識や技能を自分の生き方や社会につなげていくタイプに分類し、それぞれが新学習指導要領で求められている「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」に結び付くと説明する。

下田(2019)は、田村の捉え方を「認知的側面の高度化は強調しているが、情意的側面を含んだ、人間の内面の深みをみつめる視点に欠けている。」(p.9)とし、人間の内面の深みを捉えた学習方法の一つとして青木照明の文学教材における「瞑想読み」を「深層読み」として紹介している。その読みは、①初発の感想で直観する、②一人一人の読み深めたいことを集めて柱立てしたものについて、対話による読みの交流を行う、③自分が読み深めたことを論文テストでメタ認知していく、というプロセスを踏んで深められていくものである。下田が紹介する青木の実践における「深い学び」とは、物語の世界の中で色のもつ意味(情景、性質等)を言語化することや、抽象的な言葉の奥にある意味(象徴するもの等)、さらには作品に込められた本質、作者の世界観までも読み取ることである。

難波(2017)は、C・オットー・シャーマー博士が提唱し、中土井が日本の企業のイノベーションや変革のために取り入れている「U理論」を援用し、日本と台湾の小学校での説明文の学習指導における「深い学び」の状態を示している。この説明文の学習は、①U理論の「ダウンローディング」(いつもの自分の思考パターンで読む浅い学び)の状態から、②U理論の「観る」(開かれた思考:新鮮なものとして文章や図に出会い、自分の思考の枠組みを捨てて集中する)状態、③U理論の「感じ取る」(開かれた心:他者との対話を通して、自分が離れたところから文章や自分の考え、グループの一人一人の考えなどの全体に注意を向け、無自覚だったことに気付く)状態、④U理論の「プレゼンシング」(開かれた意志:筆者がどのような意図で文章を書いたか、説明するために

必要なことは何か等の本質を学び取り、自分が次にどうすればよいのかという思いが湧き上がってくる)状態の順に学びが深くなるよう展開されている。

下田と難波は、田村とは異なり、一単元の「読むこと」の実践において児童の読みが深まっていく状態を示している。

以上の捉え方から、「深い学び」を具体化するために必要なことは、「深い学び」を促す方法と共に「深い学び」の状態を明確にすることであると考える。

では、「深い学び」と、国語科文学教材の「深い読み」をどう捉えればよいだろうか。下田と難波の「深い学び」の捉え方を踏まえると、「深い読み」は「深い学び」でもあるが、国語科文学教材の「読むこと」の「深い学び」には、「深い読み」の他に、「深い表現」、「日常の読書生活の高まり」、「日常生活での自分の考え方の変容」等が含まれると考える。

「深い読み」については、①文章の内容を深く理解すること(自分の体験に基づき実感を伴って理解すること、書かれていることを基に別の言葉でも説明すること、言葉の奥の意味を理解すること等)や、②登場人物の内面を具体的に想像すること、③言葉、文、文章と関連付けながら人物像やテーマ等を多面的に解釈すること、④複数の本を関連付け、共通点を捉え、概念的な読みを形成することなどが考えられる。

読む学習の場合、読み取ったことを表現する力も重要である。読み取ったことや自分の考えを伝え合ったり演じたりすることにおいて「深い表現」も考えられる。

さらに、田村が示す「他の場面」につなげる場合は、自分の読書生活を高めること、「自分の生き方や社会」につなげていく場合は、登場人物の姿から自分の内面に気付き、自分の今後の姿をイメージし、変えていこうとすることも「深い学び」であると捉えられる。文学教材が人間教育も可能にすることを踏まえると、読書生活を高め、日常の自分の在り方を考えることも目指していきたいと考える。

「深い学び」は現在の教育現場で注目されているが、重要なことは、なぜそれが必要なかを教師と児童が共に理解することであると考える。そして、「深い学び」ができたことを教師が評価し児童が実感することで児童の学びに向かう力は高まる。国語科文学教材の「読むこと」における「深い学び」が必要な理由は、生涯にわたって読書とつながりながら自分自身を高めていくことを目指したいからである。教科書の文章を表面的に読む浅い学習では、様々な本を読んで考える力を身に付けることはできない。読み方の技能を使いながら読書を楽しみ、登場人物の姿から自らの生き方を考えるためには、登場人物の内面、登場人物の行動の理由、作者の作品に込めた

思い等を深く読み取る力を育成することが必要なのである。

本稿では、国語科文学教材（複数の本）を読むことにおける「深い学び」の方法として、田村の捉え方である「知識のつながり」、「構造化」に基づき、勝見（2014）の関係付けに注目する。勝見は、一つの文章を読み深める授業では思考を鍛える活動を含めることが重要だと捉え、テキストの内側を関係付ける読みとして、「部分と部分とを関係付けて読む」、「部分と文章全体とを関係付けて読む」、「部分と題名とを関係付けて読む」を挙げている（p.74）。また、勝見は、今後テキストの外側を関係付ける読みも求められるとし、「文章と他の文章とを関係付けて読む」、「文章と自分の経験、生き方とを関係付けて読む」等を挙げている（p.76）。これらは、「思考力・判断力・表現力等」を育むことにつながり、「文章と自分の経験、生き方とを関係付けて読む」は、「学びに向かう力・人間性等」の涵養にもつながると考えられる。

勝見の捉え方を踏まえると、国語科文学教材の「読むこと」における関連付けは、次のように考えられる。

- 1つの教材、1冊の絵本を部分と部分、部分と全体など関連付けて読む。
- 2つ以上の教材、2冊以上の絵本を観点に沿って比べ読みする。その観点を他の絵本を読む際にも活用していく。
- 1つ目の教材、1冊目の絵本で習得した技能（読み方）を活用して他の教材、絵本を読む学習をする。その読み方を次の読書活動にもつなげていく。

その上で、読みの深まりを目指していくこと、自分の読書生活を高めていくこと、自分の生活の中で人との関わり方や人の捉え方等を見直し、今後の自分の在り方を考えることができるようにしていくことが「深い学び」になると考える。

3. 「深い学び」を促す思考方法

第2章で示した関連付けをし、「深い学び」を目指すためには、思考方法を具体化する必要がある。その思考方法として、田村が推奨している『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』の「考えるための技法」（pp.84-85）に注目する。総合的な学習の時間は、「各教科等を越えて全ての学習における基礎となる資質・能力を育成することが期待されている」（p.83）と位置付けられ、以下の「考えるための技法」は、教科横断的なものであり、それらを活用することはより本質的な理解や洞察を得る学びであるとされている。

〈考えるための技法〉

順序付ける、比較する、分類する、関連付ける

多面的に見る・多角的に見る、理由付ける、見通す、具体化する、抽象化する、構造化する

国語科においても、これらの技法は活用されることが多い。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』（以下、『解説国語編』）第1学年及び第2学年では、「順序付ける」に関しては「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら」、「理由付ける」に関しては、「行動の理由を想像し」、「関連付ける」に関しては、「物語の中のどの場面のどのような様子と結び付けて読むか」、「文章の内容と自分の体験とを結び付けて」と示されている。

特に、「深い学び」を促す技法としては、「順序付ける」、「比較する」、「関連付ける」、「多面的に見る・多角的に見る」、「見通す」、「抽象化する」に注目したい。順序付ける技法を用いて順序の理由を考えると、作者の表現の意図に気付くことができる。一つの教材内で比較する技法を用いると、場面の様子や人物像、人物の内面の違いや変化を読み取ることができる。教材同士を比較する方法は、共通点を捉え、概念的な読みを可能にすること、相違点を捉え、人物像や人物関係の多様性に気付くことを可能にすると考えられる。自分と関連付ける技法を用いると、書かれていることが実感を伴って理解でき、登場人物の気持ちに寄り添い、内面を深く想像したり、行動の理由を深く考えたりすることが可能になると考えられる。さらに、自分と周りの状況について気付きを深めることも期待できる。多面的・多角的に見ることは、一人の人物像を複数の場面から読み取り、自分自身の人の見方にもつながっていく学びの深さがある。見通す技法を用いると、物語の結末を受け入れるだけでなく、「もし・・だったら」、「これでよいのか。」などと問い直すとともに、自分の行動の仕方や人間関係の在り方について深く考えることもできる。抽象化する技法は、全体の文章から大事なことをまとめることを可能にし、作者の思いや作品のテーマに迫るといった学びの深まりが期待できる。

このような技法は、他の本を読む場合にも活用されると考えられる。

そこで、本稿ではこれらの技法を、「深い学び」を促すための思考方法として援用する。但し、低学年の場合、思考方法の名前を直接用いて指導することは難しい。指導を可能にするためには発問を工夫しなければならない。

4. 先行研究の発問の考察

本章では、現在多く用いられている発問とは違う角度から行う発問も取り入れて構想するため、読解と読書活動に応じた発問づくり（井上：2015）と脇役から迫る発問づくり（長崎：2016）に注目する。これらの発問は、児童が考える意欲をもつことや、教科書教材で培った読

み方の技能を自分の選んだ本で活用し、多様な文章を読むことを可能にすると考えられる。

井上は、従来の発問を「固定的かつ限定的なものが多かった」(p.8)と捉え、新しい時代に求められている学力観に対応するためには次の7つが必要だと述べている(pp.8-9)。

- ①学習者から見た発問構想
- ②発問の基盤となる教材研究
- ③単元構想及び授業に基づく発問の展開
- ④読解と読書活動に応じる発問
- ⑤読書のプロセスに応じた発問
- ⑥精読力・読書力を向上させる発問
- ⑦発問の種類と発問のための学習用語

②は、授業者の口頭による発問のみならず多様な教材の中にある書き言葉の発問も関連させながら教材研究をすることである。③では、いつも同じ型の発問を繰り返さないこと、④⑤では、文章や読書活動によって発問の種類を検討すること、⑥では、様々な読む力に対応する広い視野の発問を構想することの重要性が示されている。⑦は、学年の実態に応じて学習用語を使いながら内容面と形式面について発問することである。

井上は、自ら主宰する全国国語教育カンファレンスの会員が5年以上にわたり、教材研究をして構想した発問例を紹介している。以下に1、2年生の教材において「深い学び」を促す可能性のある発問例を中心に、長崎が紹介する発問例も取り上げ、「考えるための技法」のどの思考方法を用いることができるかを【 】に示す。

【順序付ける】【理由付ける】

一般的には、誰が登場したか、どの順番で登場したかを発問することが多いが、「なぜこの順番なのでしょう。」という発問が作られている。この発問により、作者の意図を考え、読みが深まると考えられる。

【関連付ける】【比較する】【理由付ける】

「変わっていくところと変わらないところを見付けましょう。」のように、作品全体を通して変化に着目しながら読むことを促す発問が作られている。これは、反復の面白さや変化、クライマックスを捉える力を身に付けるために重要なものだと考える。さらに、分かりやすい発問にするためには、長崎(2016)が紹介する、「前の場面と比較する」のように、場面と場面とを比較する発問も考えられる。変化について読み取る場合、「どのように変わりましたか。」と問うことが多いが、長崎が紹介するように「どれくらい変わったのでしょうか。」と問い、5段階の図と数字で質の違いを表現させ、その理由を深く考えさせる方法も注目できる。

【理由付ける】

「今までは抜けなかったかぶが、ねずみを手伝ったら

抜けたのは、なぜでしょう？」という発問が作られている。「今までは抜けなかった」を前に加えることで、「本当だったら、普通ならできないのに」という否定的な意味が加わり、原因となる人物や出来事の価値に迫り、深く読むことができると考えられる。

【分類する】【抽象化する】

「題名に主人公の名前が入っているお話を探しましょう。そのお話を読んで、「～が～する」話を一文で書きましょう。」という発問が作られている。前半の発問は、児童の読書生活へつながるものであり、分類する思考が用いられる。後半の発問では抽象化する思考が用いられ、作品のテーマに迫ることが可能である。

【比較する】【理由付ける】

①教科書教材と絵本を比較し、共通点や相違点を見付ける発問、②教科書教材と絵本で好きな方を選ぶ発問、③同一作者の本の中で気に入った登場人物を選ぶ発問等が作られている。これらの多くでは根拠や理由も問われており、教科書教材だけあるいは1冊の絵本だけでは気づきにくいことにも注目することができる。

【仮定する】【理由付ける】

「子ねずみの先生は始めしか登場しませんでした。もう一度登場させるとすれば、どこにしますか。登場させる理由も言いたいです。」という発問が作られている。このような発問は、長崎(2016)も紹介するように、脇役に焦点を当てて中心人物の心情や人物関係を考えるものである。別の視点から中心人物の内面に迫ることができると考えられる。

【自分と関連付ける】【比較する】

「もしあなただったらどんなことを言いますか。」「もしあなただったらどんな行動をしますか。」「もしあなただったらどんな気持ちになりますか。」という発問が作られている。これらは自分の体験と結び付けて考えることができるものである。他には、自分の体験を想起させる発問や自分の性格や行動の仕方と比較させる発問、今後の自分自身を考えさせる発問も作られており、日常生活での自分の考えの変容につながると考えられる。

【多面的に見る・多角的に見る】【関連付ける】【理由付ける】

登場人物に言ってあげたい言葉を考えさせる発問が作られている。この場合、場面や視点を示すと、多様な考えや主題を表す言葉が引き出される可能性があると考えられる。この発問では、叙述や自分の考えと関連付ける思考や理由付ける思考が用いられることになる。

【見通す】【関連付ける】

「かぶが抜けた後の続きのお話を書きましょう。」という発問が作られている。この発問では、前の叙述と関連付けながら見通す思考を用いて人物の考え方や在り方に

ついて深く考えることになる。

以上の発問から分かることは次の2点である。

- ・「深い学び」を促す可能性のある発問では、複数の「考えるための技法」（思考方法）が用いられる。
- ・小学校第1、2学年では、「順序付ける」「比較する」「関連付ける」「理由付ける」の思考方法が多く用いられるが、それ以外の思考方法も用いられており、発問が工夫されている。

5. 絵本の特徴と絵本を用いる意義

5.1. レオ＝レオニの絵本の特徴

①現実性

レオ＝レオニ（1976）は、「頭の大きな子どもを描きたくないのです。ネズミやぼとつと落した色と自分を重ねあわせて考えるほうが、特定の人物と重ねあわせるよりも簡単です。（中略）ネズミなら、子どもはたちまち想像の世界にとびこんでいきますから、その不思議の世界で、あらゆる事が可能になってしまうのです。」と述べている（pp.50-51）。3冊の絵本の登場人物と似た人物は、現実社会の中にも存在する。子どもたちが登場人物の姿を自分たちの生活と重ねながら具体的に想像することは容易であると考ええる。

②テーマ性

レオ＝レオニ（1976）が「私にとっては、己れとは何者かを知ることが、もっとも根本的問題です。」（p.45）と述べるように、3冊の絵本は中心人物が自己認識していく様子が描かれている。スイミーとフレデリック、コーネリアスは他者と異なる存在であり、変わり者として見られがちだが、特技をもつユニークな存在、そして苦しい状況に出会うが最後には現状を変えることができるリーダーとして描かれている。登場人物の姿からは、「独りぼっちになってもじっくり見て考え行動すること」、「人と違っていても自分らしさを大切に自分のよさを生かせるところで役割を果たすこと」、「他者と違って自分の意志や勇氣、希望をもって仲間に働きかけること」が重要であるというメッセージが伝わる。

③読書の広がり

中心人物の名前が題名になっている絵本は他にもある。また、レオ＝レオニの多くの絵本には副題（『ちいさなかしこいさかなのはなし』等）がついている。3冊を読み終えた後、児童が他の絵本の題名や副題を見て、同じような絵本を読み広げていくことが期待できる。

また、レオ＝レオニの絵本は大自然やねずみなどの小さな生き物を扱ったものが多いが、それらの描かれ方は絵本によって工夫されている。ねずみが登場する絵本を読み比べる楽しさを味わうことも期待できる。

同一作者の絵本では、内容面や表現面の共通点を見出す面白さがあり、日常の読書を進んで行う力つまり「学びに向かう力」を育むことができると考える。

5.2. 『スイミー』の絵本を用いる意義

本稿では、教科書教材「スイミー」ではなく、教科書教材の原典である絵本の訳本『スイミー』を取り上げる。絵本を用いる意義は次の通りである。

①中心人物の進行方向とページをめくる向き

滝浪（2010）は、教科書の問題点の一つとして、挿絵の反転を挙げ、デジタル教科書において絵本を扱うことを提案している。筆者も同じ問題を感じているが、一人一人に絵本を用意したい。絵本は、登場人物の進行方向に沿ってページを予想しながら自分でめくり、登場人物の動きや気持ちを連続したものとして読むことができる教材だからである。

②絵の描かれ方

独りぼっちになったスイミーの寂しさを表した絵は3社の教科書のうち2社で省略されている。暗い色の海の中で小さなスイミーだけが右端の下の方に描かれている見開きの絵は、後にスイミーがその苦しい状況を乗り越えて大きく成長したことを読み取るために欠かせないと考えられる。

また、教科書の紙面の関係で生き物の絵の多くは削除されている。レオ＝レオニ（1976）が「苦しんだが故に、スイミーはじょじょに人生の美しさに気がつくようになります。このところは私にとっては、とても重要なことなのです。」（p.45）と述べているように、教科書で削除された場面の絵は、スイミーの変容・成長の読み取りにとって不可欠なものであると考える。

他の見方としては、木村（2009）の「絵本の中心部分であるスイミーの回復過程が短縮されると、物語の初めと終わりの部分が接近し、まぐろに襲われたスイミーが小魚と共にまぐろを追い払うという克服ストーリーに変質しやすくなる。」（p.130）を挙げることができる。この見方を踏まえると、絵本では、大きな魚を追い出したのは結果であり、海の中をみんなで楽しみながら泳ぎたいという思いの強さから大きな魚を作ったことが強調される。

このように、絵本の絵は文章の読み取りにおいて重要な役割を果たしているのである。

6. 絵本の教材研究と発問構想

本章では、『スイミー』と『フレデリック』との比べ読みを授業で学んだ後、『コーネリアス』を自分で比べて読む場合と、『スイミー』の授業で習得した読み方を『フレデリック』の読解で活用する学習をした後、『コーネリア

ス』を自分で読む場合について、教材研究をし、「深い学び」を促す主な発問構想のモデルと「深い学び」がどのような状態であるかを示す。

『コーネリアス』で用いる発問は、児童が自力で読むためのてびき（書き言葉の発問）である。

6.1. 『スイミー』と『フレデリック』との比べ読みを授業で学んだ後、『コーネリアス』を自分で比べて読む場合

「比べて似たところを見付けよう」という発問を提示するだけでは低学年の児童はどこに着目して比較すればいいのか分からず、表面的な読みで終わってしまう恐れがある。本来、既習の読みから比較の観点を児童自ら考えさせることが主体的な学習といえるが、本稿では、学習の初期段階として授業者が以下の比較の観点（性質、行動、気持ち、役割）を設定するものとする。比較の観点は、絵本の共通点を捉えられものにした。

単元は以下の流れで構想する。

- (1) 中心人物の性質を比較する。
- (2) 中心人物の行動や気持ちの変化、その理由を比較する。
- (3) 中心人物の役割を比較する。

(1)～(3)の発問構想と「深い学び」を以下に示す。

『スイミー』と『フレデリック』の比べ読みでは、(1)から(3)までの学習を行い、その後『コーネリアス』について自分で(1)から(3)までの学習を行う。但し、(1)(2)(3)の各学習で示した発問構想は、『スイミー』『フレデリック』『コーネリアス』の順になっている。その理由は、(1)～(3)の各学習内容について複数の絵本を関連付けながら発問することでどのような学びが深いかを考えたいからである。

- (1) 中心人物の性質を比較する

①『スイミー』、『フレデリック』のそれぞれの絵本の中で中心人物（スイミー、フレデリック）と周りの人物を比較する

発問① スイミー（フレデリック）は他の仲間たちと比べてどんなどころが違うのでしょうか。

まずスイミーと他の魚たちを比較すると、スイミーは他の魚たちの中で一匹だけ真っ黒であるが、だれよりも泳ぎが速い。そして、最後には、一匹の大きな魚を作れるようになるまで赤い魚たちを指導し、自分の体の黒色を生かしてその魚の目になるというリーダー性を発揮している。フレデリックと他ののねずみたちを比較すると、冬の準備のために一生懸命働くのねずみたちの中で、フレデリックだけはじっと空想にふけて動かないが、詩を作ることができ、最後には詩人としての力を発揮する。ここでは、勝見のテキストの内側を関係付ける読みが行われ

る。

- ②スイミーとフレデリックを比較する

発問② スイミーとフレデリックの似ているところはどんなところでしょうか。

次に、スイミーとフレデリックを比較すると、どちらも集団の中で一匹だけ異なる存在であるが特技を持ち、最後に力を発揮するという概念的な読みが形成され、①より「深い学び」の状態になる。ここでは、勝見のテキストの外側を関係付ける読みが行われる。

- ③コーネリアスをスイミーやフレデリックと比較する

発問③ コーネリアスは、スイミーやフレデリックと似ているのでしょうか。

発問①②での読み方を基にまず、コーネリアスを他のわにたちと比較すると、他のわにたちは這うが、コーネリアスだけは生まれつき立って歩く。そして他のわにたちが見ることのできないものを見ることができる。さらに逆立ちやぶら下がりもできるようになり、特技を増やす。このコーネリアスをスイミーやフレデリックと比較すると、「他者とは見た目や行動の仕方が著しく異なる存在であるが、他者にとって難しい、見ることや考えることができるという特技、個性を持っている」という概念的な読みが確実になる。ここでは、レオ＝レオニが描く中心人物の性質に共通点があることに気付くことになる。また、コーネリアスについてスイミーとフレデリックとの相違点（違う種類の仲間くさる）のできるくさる（逆立ちとぶら下がり）を認め、それらをさるに教えてもらい、努力してできるようになること、自分ができることを最初から伝える積極性も読み取り、人物の新たな面を捉えることができれば「深い学び」になる。

生活の中で子どもは、自分たちと異なる人に対して固定観念や偏見をもつ傾向があるが、このようにスイミーとフレデリック、コーネリアスを比較することは、前述したU理論の、自分の思考の枠組みを捨て集中して「観る」状態の学びに当たると考えられる。

- (2) 中心人物の行動や気持ちの変化、その理由を比較する

①『スイミー』、『フレデリック』のそれぞれの絵本の中で比較する

発問① 最初と比べてスイミー（フレデリック）はどれくらい幸せになったのでしょうか。図と数字で表して比べましょう。なぜそう思いますか。

一般的によく用いられる「どのように変わったのでしょうか。」よりも、「どれくらい変わったのでしょうか。なぜそう思いますか。」を用いる方が、質の違いを言葉で表す必要性が出てくる。例えば、スイミーについては、楽しくなった、うれしくなったと表面的に読むのではなく、最初は「自由に遊ぶことができて楽しかった」、最後は、「み

んなでまとまって泳げるようになり安心できるようになった、みんながいるから大丈夫という気持ちになった」というように、「幸せ」という言葉の意味を深く考えることができる。

②スイミーとフレデリックを比較する

発問② スイミーとフレデリックの似たところはどこでしよう。

スイミーとフレデリックの共通点は、最初は一人の自由があるが、最後は集団の中で仕事のできた達成感、みんなが一つにまとまり元気になった喜び、仲間と共に過ごす幸せなどを感じられるようになることである。このように、「幸せ」の多様な意味を読み取れることは、「深い学び」の状態だと考えられる。

②コーネリアスをスイミーやフレデリックと比較する

発問③ コーネリアスもスイミーやフレデリックみたいに幸せになったのでしょうか。どれくらい幸せになったのでしょうか。なぜそう思いますか。

コーネリアスは、最初はわにたちに自分のできることを認めてもらえず、自分から離れていくので幸せは感じられないが、違う種類の仲間のさとと練習して習得した技を再度見せることでわにたちが練習を始めたことに喜びを感じ、「かわぎしでのくらしはこれですっかりかわるだろう。」と希望をもつことができるようになる。

発問③により、3冊から中心人物はみんな一人の時間をもつが、他者に出会ったり交流したりすることにより気持ちが大きく変化したという概念的な読みができる。そして、他者との出会いや交流が、他者と異なる自分を受け止めたり自分にできることを集団の中で生かしたりするために重要なものであることを教えられる。レオ＝レオニが根本的な問題としている自己認識（己れとは何者かを知ること）や個性を生かすことを読み取ることは、下田が示す、登場人物に込められた作者の本質、作者の象徴（世界観）を感じるという「深い学び」になると考えられる。但し、コーネリアスは、他の2冊の人物と異なり、最後に仲間と一緒に何かを成し遂げたり喜び合ったりしていないため、これまでと同様の読みはできない。ここでは、コーネリアスが本当に幸せになったかどうかは意見が分かれるところである。児童同士の意見の交流により、幸せの意味をいろいろな角度から捉えることができる。この読みは、U理論の「感じ取る」状態であり、「深い学び」の状態であると考えられる。

(3) 中心人物の役割を比較する

『スイミー』、『フレデリック』のそれぞれの絵本で読み取った後、スイミーとフレデリックを比較する。

発問① スイミーとフレデリックはみんなのためにどんなよいことをしたのでしょうか。

スイミーは、大きなまぐろがいる海の中で勇気をもつ

て生きていくためにみんなで協力して大きな魚を作ることの思いつき、怖がっていた新しい仲間たち（赤い魚たち）を粘り強く指導する。フレデリックは、寒くてつらい思いをしているのねずみたちを想像の世界に導き、温かい気持ちにさせ元気づけている。小さなスイミーとフレデリックは、他の者が見えないもの（スイミーの場合は大きな魚、フレデリックの場合は光・色・言葉）をイメージし、それを伝える、芸術家としての役割を果たしている。このような共通点を捉えた内容の読みは、概念的な読みとともに、作品に込められた本質を捉える読みにもなり、「深い学び」の状態である。

発問② コーネリアスもみんなのためによいことをしたのでしょうか。

コーネリアスは、自分が立ってできることをわにたちに教え続けても認められなかったが、わにたちが見ることのできないさるの技を身に付けわにたちに見せることで、結果的には、協力し合い高め合おうとする集団へ変えていく重要な役割を果たしていると言える。

3冊の絵本からは、一見他者と異なる人物は偏見をもたれやすいが他者にはできない特技で集団をまとめたり、高めたりする大切な役割を果たすことを読み取ることができる。これは発問①のときと同様に、下田が示す、作者の思いや作品の本質、作者の世界観を読み取る「深い学び」にあたると思われる。

また、自分自身が人物を表面的に見たり自分の個性を否定的に感じたりすることの問題点や、人物を多面的に見ることの大切さに気づくこともできる。このような気づきができれば、U理論の「感じ取る」の段階の「深い学び」ができる。さらに、レオ＝レオニが根本的な問題とする自己認識（この単元の場合、登場人物の姿から自分がどんな子どもか考えること）が自分の内面でもでき、次の行動に進んでいこうとする思いが沸き上がってくれば、U理論の「プレゼンシング」の「深い学び」へ到達することになると考える。

以上のように3冊の絵本を、比較する思考方法を用いて読む場合、『スイミー』、『フレデリック』での発問が『コーネリアス』を読む時に活用され、絵本の関連付けの中での「深い学び」の状態が見えてくる。

6.2. 『スイミー』の授業で習得した読み方を『フレデリック』の読解で活用する学習をした後、『コーネリアス』を自分で読む場合

単元を次のような展開で行うと想定する。【 】は主な思考方法を示す。

- (1) 中心人物の性質を読み取る【比較する】
- (2) 登場人物の行動や気持ちの変化、その理由を読み取る【関連付ける、理由付ける、順序付ける】

(3) 中心人物に対する自分の思いをもつ【自分と関連付ける、理由付ける】

(4) レオ＝レオニの思い、作品のテーマに迫る【多面的に見る・多角的に見る、抽象化する、比較する】

(5) 物語の続きを自分なりに考える【見通す】

(1) 中心人物の性質を読み取る

この学習の発問は、6.1.の(1)と同じである。

発問① スイミーは他の仲間たちと比べてどんなところが違うのでしょうか。

発問② フレデリックは他の仲間たちと比べてどんなところが違うのでしょうか。

発問③ スイミーとフレデリックの似ているところはどんなところでしょうか。

発問④ コーネリアスは、スイミーやフレデリックと似ているのでしょうか。

(2) 登場人物の行動や気持ちの変化、その理由を読み取る

①『スイミー』

発問① スイミーは、独りぼっちになった時、怖い思いをしたのに、なぜ赤い魚に呼び掛けて大きな魚を作ることができたのでしょうか。

この発問をすることで、スイミーが勇気をもったきっかけに着目することになり、生き物たちと出会った場面と関連付けながらスイミーの内面(他の生き物たちのように自分らしく生きたい、隠れないで勇気をもって強く生きていきたい、みんなと安心して楽しく遊びたい、小さいものが集まれば大きな力になるという思い等)を深く読み取ることができる。

②『フレデリック』

発問② フレデリックはずっと横や後ろを向いていたのに、なぜ、最後に正面を向いたのでしょうか。

絵の中のフレデリックは、結末で初めて紙面の真ん中に立ち、正面を向いている。このような紙面上での位置や顔の向きにも着目させると、絵からもフレデリックの内面が読み取れることに気づく。発問②では、のねずみたちに自分が集めたものを伝え、認めてもらった場面と関連付けながら、フレデリックの内面(想像したことを伝える役割を果たした喜びや満足感、自分の仕事をするのでできた達成感、思いがけなく褒められた照れくささ等)を深く読み取ることができる。

③『コーネリアス』

発問③ コーネリアスはわにたちに自分のことを認めてもらえなかったのに、なぜ戻ったのでしょうか。

これまでわにたちとうまく関わられなかったコーネリアスが戻れた原因を考える発問である。この発問により、さるに関わってもらいながら新たに習得した技をわにたちに見てほしいという強い思い、新たな技を仲間へ教えた

い思い、やればできると教えた思い等の内面を深く読み取ることができる。

①②③の発問では、叙述と関連付けながら中心人物の内面を読むことになり、「深い学び」が促される。

発問④ わにたちは最後まで「へえそれで!」というだけだったから気持ちは変わっていないのではないのでしょうか。

わにたちの様子や気持ちの変化については、絵から読み取れる。コーネリアスが逆立ちをする場面とその後のぶら下がる場面の絵を比較してみると、わにたちはコーネリアスに近づいていき、顔を少し上げてコーネリアスを見ている。その後、わにたちが一生懸命練習している表情は嬉しそうであることから、わにたちの気持ちは変わったと読み取れる。しかし、コーネリアスに対して直接、認める言葉を言っていない。④の発問で児童が自分の思いと重ねながら、わにたちのうらやましさ、負けたくない思い、認めたいけど素直に言えない気持ちなどの複雑な内面を読み取ることは「深い学び」にあたると思われる。

中心人物の気持ちの変化の理由を読み取る際の補助発問として、順序付ける思考を用いることも考えられる。『スイミー』では、スイミーの成長に大きな影響を与えた生き物たちの登場する順序に着目させたい。様々な生き物たちの登場の順序で絵カードを並べさせる場合、あえて間違った順序を提示し、「この順序でもよいのではないのでしょうか。」と揺さぶることで、これまでの自分の順序の捉え方で考えさせることになる。その発問では、スイミーが徐々に新しいものに慣れていくよう静から動へ、単数から複数へという順序になっているのではないかと、生き物たちに興味をもつことができるように始めの方で美しい生き物、面白い動きをする生き物に出会えるようにしているのではないかなどと考えることができる。『フレデリック』においても同様に、のねずみたちに教えた光、色、言葉という順序に着目させてその理由を問うことで、想像しやすい順序になっているのではないかと、それにより、のねずみたちが想像の世界に入り込みやすくなり、フレデリックを称賛し、フレデリックは集団のために自分の役割を果たした実感をもつことができたのではないかなどと考えることができる。コーネリアスは、さるから逆立ち、ぶら下がりの順に教えてもらい、その順序でわにたちにその技を披露する。これは、まず易から難という順序、低い位置から高い位置への順序というように考えることができる。しかし、これらの正解があるわけではない。児童が自分の順序意識をもって考え、友達と交流することで多様な考え方があることに気付く。これは難波が紹介しているU理論の「感じ取る」に類似していると考えられる。

(3) 中心人物に対する自分の思いをもつ

『解説国語編』第1学年及び第2学年の「読むこと」の一つに「文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと」(p.69)と示されているように、自分と関連付ける思考方法を用いて読むことで、登場人物に同化しやすくなり、その気持ちや人物関係を実感をもって具体的に想像することが可能になると考えられる。

①『スイミー』

発問① 自分だったらどうしますか。どう思いますか。

『スイミー』では、独りぼっちになったスイミーの様子や気持ちを想像するときにこの発問が考えられる。

②『フレデリック』

発問② フレデリックみたいにみんなと同じ行動をしない友達がいたらどうしますか。どう思いますか。

『フレデリック』では、じっと空想にふけりみんなと同じ働き方をしないコーネリアスに対するのねずみたちの気持ちを想像するときに、この発問が考えられる。このような発問により、児童は、自分の体験に基づき、人物の思いや行動の仕方について考え、後の学習でその人物の気持ちの変容に心を打たれることになる。

③2冊の絵本の学習の終わり

発問③ スイミーとフレデリックのどちらになりたいですか。スイミーとフレデリックのどちらと親友になりたいですか。それはなぜですか。

④『コーネリアス』

発問④ 自慢するコーネリアスに対して自分だったらどうしますか。どう思いますか。

発問⑤ コーネリアスはさるに教えられてできるようになったことをわにたちに見せたけど、自分だったらそれを見てどうしますか。どう思いますか。

⑤単元終了時

発問⑥ 3冊の登場人物の中で誰になりたいですか。誰と親友になりたいですか。また、それはなぜですか。

発問①②④⑤は、人物の気持ちを具体的に想像するときの発問である。③⑥では、2冊の絵本同士、または3冊の絵本同士を比較する思考を使いながら現実の自分と向き合い、自分の在り方を考えることができるため、U理論の「感じ取る」「プレゼンシング」の「深い学び」の状態になると考えられる。

(4) レオ＝レオニの思い、作品のテーマに迫る

①『スイミー』、『フレデリック』

発問① 〇〇、〇〇・・・の人物にどんな言葉を言っていたいですか。〇や〇、〇の場面から考えましょう。その人物がしたことや言ったこと、考えたことについて自分の思いを伝えましょう。

これは、多面的に見る・多角的に見るという思考方法を用いて、登場人物の行動や考え方を批評する学習にな

るが、児童の書いたものの中には、作者の思いや作品のテーマに関する言葉が出てくると考えられる。『スイミー』では、言葉をかける相手をスイミー、赤い魚たちとし、『フレデリック』では、フレデリック、ねずみたちとするとともに、複数の場面からいくつか選択させ、具体的な言葉を書くようにすれば、一人の児童が多様な考えを持つ可能性が高くなる。複数の場面から考えることで、意識していなかった新たな視点で人物像や作品のテーマなどを読み取ることが可能になり、「深い学び」の状態になると考える。これらの2冊を学習した後には下記の共通点を見出すこともできる。

- 1) 自分と異なる者の良さを受け入れる素直さや寛容さ
- 2) 他のが見えないものを想像する力
- 3) 自分の考え、理想を貫く粘り強さ
- 4) リーダーとして仲間に教え、問題を解決する。
- 5) 他のが異なっていることを受け止めた上で、自分しかできない役割を果たす。自分の個性を生かす。

以上のような複数の読みができれば、作者の思いやテーマに迫ることができており、深い読みだと考えられる。

②『コーネリアス』

『コーネリアス』においても同様の発問をすることができる。さるが、自分とは違う種類のコーネリアスの得意なことを否定せず、対等に自分のできることも伝え、練習に快く付き合った場面では、さるの素直さや寛容さ、優しさを捉えることができる。さるの技を見て教えを乞うコーネリアスについては上記の1)と共通している。また、好奇心をもって新しいことにチャレンジしようとする姿も読み取れる。さると練習を続ける場面のコーネリアスに対しては、粘り強さが感じられる。これは上記の3)と共通している。コーネリアスができるようになったことを伝えてわにたちの行動が変わった場面では、コーネリアスに対しては4)と5)を、わにたちに対しては1)を読み取ることができる。

これらの多様な読みができること、作者の思い、作品のテーマに迫ることは、下田が示す、作品に込められた本質、作者の世界観を読み取ること、U理論の「感じ取る」の状態の読みにあたり、「深い学び」の状態になると考えられる。

レオ＝レオニの思い、作品のテーマに迫るために、自分が作者になったつもりで副題を作るという活動も考えられる。

発問② 自分がこの絵本の作者だったらどんな副題をつけますか。

ここでは、抽象化の思考方法を用いることになる。

但し単にあらすじをまとめるのではなく、絵本から何を教えられるか、何が大事な言葉か、何が大事なことか

を考えて一言でまとめるという条件のもとに、「自分にしかできないことで活躍したさかなのはなし」、「みんなと違うところがあってもみんなのために役に立ったさかなの話」、「得意なことでもみんなを元気にしたのねずみのはなし」、「すごい想像力をほめられたのねずみのはなし」等を作ることができれば、「深い学び」になると考える。

『コーネリアス』についても同様の発問をすると、「褒めてもらえなくてもできることを一生懸命伝えたわにの話」、「素直に頑張って技を増やしたわにの話」等の副題が出てくる可能性がある。

(5) 物語の続きを自分なりに考える

低学年の授業では、話の続きを作る活動が行われることが多いが、児童の思考を揺さぶる発問をすることで、結末を当たり前に入力するだけでなく、人物の行動や人物相互の関係について批評することができれば、「深い学び」が促されると考える。

この学びでは、見通すという思考方法が用いられることになる。

①『スイミー』

発問① これからもスイミーたちは、ずっと一緒に泳ぐのでしょうか。

『スイミー』の結末ではみんなが一つになる素晴らしさ、楽しさを感じ、共に生きていく続き話を作る場合が多いと考えられるが、見方を変えると、現実問題として一人一人が自由になって行動する話を作ることも考えられる。この発問により、集団で団結することと一人一人が自由に自分らしく行動することのそれぞれの良さを引き出すことができると考える。

②『フレデリック』

発問② フレデリックはこの後、のねずみたちにどんなお話をするのでしょう。

『フレデリック』では、最後の「そういうわけさ。」というフレデリックの言葉に注目させたい。松岡(2013)は、英語版から訳されたこの言葉がレオによってイタリア語版で「ぼくは拍手はいらない、みんなにも拍手なんてしない。それぞれが自分の仕事をしているだけさ。」(p.149)と書き換えられたことを紹介している。フレデリックが恥ずかしそうに言った最後の場面は、自分の仕事や得意なことについてのフレデリックの思い等を引き出すことができる場所である。

発問③ コーネリアスは、これからさるのところに帰るのでしょうか。それともわにたちと生活するのでしょうか。

『コーネリアス』の結末の文は、「かわぎしでのくらしはこれですっかりかわるだろう。」である。③の発問により友達との関わり方について考えることができる。また、結末で、わにたちのいる場所にさるが登場すると仮定

し、「さるは、コーネリアスとわにたちに何と云うのでしょうか。」という発問も考えられる。さるに語らせることにより、コーネリアスの気持ちや物語の中の大事なことに迫ることが可能になると考えられる。

以上のように、レオ＝レオニの3冊の絵本を関連付けて読む(1)～(5)の各学習においては、共通、類似の発問が用いられることが示された。また、「深い学び」の状態として、概念的な読みや言葉の意味の深い理解、作品の本質や作者の世界観に迫る読み、U理論にあたる読みと考え(これまでの思考の枠を捨てて「観る」状態の読み、作品や自分の内面について無自覚だったことに気付く「感じ取る」状態の読み、作品から自分の今後の在り方を考え、行動に移そうという思いが湧き上がる「ブレゼンシング」の状態の考え)を示すことができた。

6.3. 日常の読書活動・日常生活につなげる場合

これまで小学校では、教材間の関連付けや読書生活、日常生活との関連付けにかかわる発問の吟味が十分にされてこなかった。

本稿では、『スイミー』、『フレデリック』の読み方を学習し、個人が『コーネリアス』を読んだ後の、日常の読書生活の構築へ向かう発問、日常生活につなげるための発問を以下のように構想する。

① 中心人物の名前が題名になっているレオ＝レオニの本を探して読んでみましょう。

レオ＝レオニの絵本の中でねずみや魚が出てくるお話を読んでみましょう。

レオ＝レオニの絵本の中で、中心人物の気持ちが変わる絵本を読んでみましょう。

② レオ＝レオニの絵本を何冊読めましたか。

③ レオ＝レオニの絵本の中で気に入った本はありますか。気に入った人物はいますか。なぜ気に入ったのかその理由を書きましょう。

④ 中心人物の名前が題名になっている他の作者の本を読んでみましょう。

ねずみや魚、わにが登場する絵本を読んでみましょう。

⑤ 今からの読書でどのように読んでいきたいですか。

⑥ 絵本を読んで、自分のことを振り返ってみましょう。

絵本を読んで、自分の友達の良いところ、がんばっているところ、自分のよいところについて気が付いたことを日記に書きましょう。

⑦ 絵本を読んで、自分はこれからどんなことをしていきたいですか。日記に書きましょう。

①は、自分で本を選ぶことができるように導くための発問である。②は、自分の読書の実態を確認するための発問である。③は、感想をもつための発問である。

④は、他の作者の絵本を読むように導くための発問で

ある。⑤は、読み方の目標をもたせる発問である。⑥⑦は日常生活へつなげていくための発問である。⑥で、自分や友達の内面を見つめ、気付くことができれば、U理論の「感じ取る」の「深い学び」の状態になり、⑦でさらに、自分が今後していきたい思いが湧き上がってくればU理論の「プレゼンシング」の「深い学び」に到達すると考えられる。

7. 考察

本稿では、『スイミー』、『フレデリック』、『コーネリアス』を関連付ける発問を複数の思考方法を用いて構想する中で、『スイミー』と『フレデリック』で構想した発問は、『コーネリアス』を読む場合にも活用できる発問になることが分かった。

同一作者の絵本（中心人物の名前が題名になっている絵本）を読む学習においては、「深い学び」の状態を次のように捉えることができた。

①2冊あるいは3冊の絵本の共通点を捉えることで、人物像や人物の気持ちの変化の仕方、作品のテーマ、人物の役割等について概念的な読みを形成することができる。また、相違点を捉えることで、人物像や気持ちの変化の仕方、テーマ等について新たな面を読み取ることができる。

②「幸せ」などの気持ちを表す言葉の場面による違いを具体的に言語化することができる。つまり、その場面ではどんなことを「幸せ」と感じているのか、「幸せ」を別の気持ちを表す言葉に変えるとどうなるかなどを考えて言語化することができるということである。

③叙述や絵、自分と関連付けながら登場人物の多様な内面、複雑な内面を具体的に想像することができる。

④中心人物が他の登場人物と出会った順序や中心人物が他の人物に教えたことの順序の理由を考えることで、作者の表現の意図を考えることができる。

⑤多面的・多角的に見る思考方法で登場人物に言葉をかける学習や、抽象化する思考方法で絵本の副題を考える学習において、作者の思いや作品のテーマを捉えた言葉を使うことができる。

⑥結末を当たり前を受け入れるだけでなく、人物の行動や人物関係について批評し、それをもとに、見通すという思考方法で話の続きを作ることができる。

⑦登場人物の姿からこれまでの自分を振り返り、内面の問題点に気付くこと、自分の今後の在り方を考えること、自分の行動を変えようという思いをもつことができる。

本稿では、複数の思考方法を用いることにより、多様で視野の広い発問が構想された。本稿で示した思考方

法と発問は、児童が3冊の同一作者の絵本を読む際に活用され、読む力と共に人間性等の育成にも資する可能性があるものである。

今後、大学でこの思考方法を用いて教材研究と発問構想をする授業を行い、学生の反応を分析していく。そして、小学校においても思考方法を用いた発問で国語科「読むこと」の授業を実践し、「深い学び」の姿を検証していきたい。

参考文献

- 青木照明 (2011) 『言霊が実現する瞑想読み 愛と平和をを目指す心と魂の教育』文芸社
- 稲葉昭一 (2018) 「レオ・レオニの子どもたち—『スイミー』、『フレデリック』、『ペツェッティーノ』、『コーネリアス』に込めた思い」『英語英文学論集』第46巻, pp.226-239
- 井上一郎編著 (2015) 『読解力を育てる! 小学校国語定番教材の発問モデル 物語文編』明治図書
- 勝見健史 (2014) 『『活用』の授業で鍛える国語学力～単元・本時デザインのための具体的方法～』文溪堂, pp.74-76
- 木村松子 (2009) 「教材解釈における「warモデル」と「careモデル」に関する一考察—レオ・レオニ『スイミー』に焦点を当てて—」『学校教育研究』第24巻, pp.126-140
- 下田好行 (2019) 「『主体的・対話的で深い学び』における深さの捉え方—人間の認識活動に焦点をあてて—」『東洋大学文学部紀要, 教育学科編』第44巻, pp.9-17
- 滝浪常雄 (2010) 「検証「スイミー」の教材研究—絵本と教科書の間 (はざま) で—」安田女子大学児童教育学会編『児童教育研究』第19号, pp.37-41
- 田村学 (2018) 『深い学び』東洋館出版社
- 中土井僚 (2014) 『人と組織の問題を劇的に解決するU理論 入門』PHPエディターズ・グループ
- 長崎伸仁編著・長崎ゼミナール著 (2016) 『小学校国語 物語の「脇役」から迫る 全員が考えたくなる しかける 発問36』東洋館出版社
- 奈須正裕 (2017) 「座談会」全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部『国語授業における「深い学び」を考える—授業者からの提案—』東洋館出版社, pp.6-37
- 難波博孝 (2017) 「U理論から考える深い学び—一日台共通 小学校説明文実践を通して—」『国語教育研究』第58号, pp.36-44
- 細恵子 (2019) 「国語科における「深い学び」を生み出す絵本の活用の可能性—『スイミー』と『フレデリック』との関連付けを通して—」『国語教育思想研究』第19号, pp.9-18
- 松岡希代子 (2013) 『レオ・レオニ 希望の絵本をつくる人』美術出版社
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)

解説国語編』東洋館出版社
文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)
解説総合的な学習の時間編』東洋館出版社
山本茂喜編著 (2017) 『思考ツールで国語の「深い学び」』
東洋館出版社, pp.8-43
レオ＝レオニ, 谷川俊太郎訳 (1969) 『スイミー ちいさな
かしこいさかなのはなし』好学社

レオ＝レオニ, 谷川俊太郎訳 (1969) 『フレデリック ちょっ
とかわったのねずみのはなし』好学社
レオ・レオニ, 掛川恭子訳 (1976) 「一九三六年ミラノから」
『子どもの館』6月号, 福音館書店
レオ＝レオニ, 谷川俊太郎訳 (1983) 『コーネリアス たって
あるいたわにのはなし』好学社

Ways of Thinking and Planning of Questions to Encourage Deep Learning in the Reading Class in the Elementary School Japanese Language Course: Focusing on the Use of Picture Books by the Same Author

Keiko HOSO

Senri Kinran University

Abstract

The purpose of this paper is to examine ways of thinking about embodying deep learning in a Japanese language course that reads picture books by the same author. Another goal is to plan questions that correspond not only to simply reading but also to reading activities. The other purpose is to show the potential power of reading and thinking. In this article, we will examine the picture books “Swimmy,” “Frederick,” and “Cornelius,” which are used in the unit “Swimmy” in the second grade of elementary school, with a focus on how skills to develop ways of thinking are used in a comprehensive study class. We also highlight research on teaching materials conducted with the aid of previous studies of methods of planning questions. As a result, we are able to envision various questions with a broad view. Toward the end, we look at how “what to associate with what and what to think of” are taught. The methods of thinking and planning questions presented in this paper may contribute to the development of the ability to read. They may also help to build the capacity to learn and cultivate personality.

Keywords : Deep Learning, Picture Books, Same Author, Ways of Thinking, Planning of Questions